

研究代表者 所属・職：社会福祉学部・教授

氏 名：大谷 京子

研究課題名：共生社会の実現を目指した、精神障害に関するエビデンスに基づく
啓発プログラム開発

取り組み状況

本研究の目的は、①精神障害に関するエビデンスに基づく啓発プログラム開発、②啓発プログラムの試行と改良案の作成、③効果測定指標の開発である。これらを、申請者も参画する A 地域自立支援協議会精神障害者地域生活支援部会啓発チーム(以下、チーム)との協働で進めてきた。

チームでこれまで実施してきたプログラムに、新たな改良点として、大学生によるクイズ形式のプレゼンテーションを加えた。高校生にとって身近な存在が仲介することにより、当事者や家族、専門職からのメッセージが聞き入れやすくなる効果を狙った。

倫理審査を経て、高校生を対象にしたプログラムの評価を行った。これまでの調査によって、本プログラムによって受講者の精神障害者に対するイメージは好転することが明らかにされていたため、今回は、さらに、スティグマ的態度と社会的距離の変化を測ることとした。質問紙作成にあたり、チームメンバーで検討を加え、項目の精選、文言の修正などを行った。

プログラムは 11 月と 12 月に 2 回実施され、生徒 139 名から事前と事後に回答を得た。また高校独自のアンケート用紙による自由記述の感想文もデータとした。量的・質的分析を加え、報告書を高校教員とチームメンバーに還元した。

研究成果の内容

1. 啓発プログラムの評価

今回の実践による質問紙調査の結果は以下の通りである。

事前と事後の差について、「精神障害者と話すの

は難しい」「精神障害者には話しかけづらい」の 2 項目が最も大きくなった。社会的距離の中で最も大きな差が得られたのが、「あなたの家にホームステイする」、2 番目が「あなたのクラス担任になる」ことを意識するかという項目だった。

1 項目以外のすべての項目について、事後の方がスティグマ態度が好転し、社会的距離が縮まっており、1%水準で有意な差が認められた。

因子分析(最尤法・プロマックス回転)の結果、スティグマ態度は、「精神障害者との関わりにくさ」と「恥意識」という 2 つの因子からなることが示された(表 4, 5 参照)。「関わりにくさ」因子は、「精神障害者には話しかけづらい」「精神障害者と一緒にいると緊張する」といった 5 項目で構成される。「恥意識」因子は、「家族に精神障害者がいるのを知られるのは恥だ」「精神障害者は自分の状態について恥ずかしいと感じるべきだ」といった 4 項目で構成される。

社会的距離感については、11 項目を 1 つのまとまりある質問群であることを確認した(表 7 参照)。その上で、社会的距離得点を算出し、前後比較をした結果、1%水準で有意な差が得られ、好転していることが示された。

講義メモには、「友達には打ち明けてもらいたいのには、自分は打ち明けられないと感じている矛盾」への気づき、「友達との信頼関係を大切にしよう」という感想、「友達の負荷を考えるとやっぱり言えない」「人に打ち明ける前に自分が受け入れなければ」といった多様な考えが綴られていた。

こうした結果を踏まえ、①シンポジウム形式の方法による効果が大きいこと、②1 回目で知識を入れメンタルリテラシーの向上を企図し、2 回目で身近なテーマのシンポジウムで「我が事」として考える機会をつくるという 2 回連続プログラム

の構造が有効であること、③行動変容には課題が残ることが示された。

今後のプログラムに対する課題として、①高校教員との協働、②行動変容を促進する要素の取入れが必要であると考えられる。

2. 今後の課題

行動変容を促すプログラム改良、行動を測定する指標の探索、意識と行動変容の定着を測るために、フォローアップ調査をすることが今後の課題となる。